

インド密教における『秘密集会タントラ』の受容と展開

菊谷竜太（東北大学大学院専門研究員）

インド密教におけるタントラ聖典の受容と展開に関して、聖典を取り巻く流派の存在が大きく関わってきたことは良く知られている。根本タントラ（*mūlatantra*）に付随する釈タントラ（*ākhyānatāntra*）にこの流派的傾向が顕著に見出され、聖典の伝達に重要な役割を果たしてきたと考えられることも先行研究によって指摘されてきた。

『秘密集会タントラ』*Guhyasamājatantra* に関して言えば、チベット大蔵経中には同タントラを根本タントラに位置付ける釈タントラとして、①『密意解釈』*Samḍhyāvyaḱaraṇa*（東北 444）、②『金剛鬘』*Vajramālā*（東北 445）、③『四明妃請問』*Caturdevīparipṛcchā*（東北 446）、④『金剛智集』*Vajrajñānasamuccaya*（東北 447）をはじめとする都合 10 点の釈タントラが収録されている。そのうち、②・④に関して聖者流との結び付きが顕著に見出されることは、松長 [1980]、苦米地 [1992ab] の研究によって明らかにされている。一方、聖者流と双璧をなしたジュニャーナパーダ流と釈タントラの関係については、従来の研究ではあまり注目されることはなかったように思われる。

本発表において取り上げる『金剛心髓莊嚴タントラ』*Vajrahṛdayālaṅkāratāntra*（東北 451）は、ジュニャーナパーダ流と密接な関わりをもつと考えられる釈タントラの一つである。サンスクリット原典は未発見であるが、カマラグプタ及びイエーシェーゲンツェンによって共訳されたチベット訳が残されている。全 18 分から構成され、根本タントラを意識した章立てになっている。注目されるのは、第 11 分の「一切タントラを区分する」章である。同分は「方便タントラ」に属するタントラ在具体名と分量とがひとつひとつ列挙されており、方便とダーキニーという二つのタントラ区分と共に「抱擁・手をとる・微笑み合う・見つめ合う」という 4 つの分類法や、「内」と「外」というタントラ区分も説いている。また、同分には、①～③のタントラ名が見出されることから、釈タントラ同士の成立関係や流派形成史についても、有益な情報を齎すことが期待出来る。

『金剛心髓莊嚴タントラ』は、ジュニャーナパーダの弟子或いは孫弟子と目されるヴィタパーダ（ca.900-950）の教学やタントラ分類法にとりわけ強い影響を与えたと考えられる。このことは、ヴィタパーダの著作においてしばしば同タントラとの平行部分や引用箇所が見出されることから裏付けられる。また、ヴィタパーダを中心に、ジュニャーナパーダ流の主要典籍の翻訳に関わったイエーシェーゲンツェンが同タントラの翻訳・伝承に関わったこと、サキヤ派の伝統において、同タントラがジュニャーナパーダ流の文殊金剛 19 尊曼荼羅の根本聖典と目されていることも、ジュニャーナパーダ流と『金剛心髓莊嚴タントラ』が関係していることを示唆する補強的材料になると思われる。